

誰にもこんな思いは させたくない

家事労働者の虐待防止



国際労働機関



ILO駐日事務所

国際労働機関 (ILO) は、仕事の世界を扱う国連の専門機関です。第一次世界大戦を終結させたベルサイユ条約により、1919年に創設されました。世界の永続する平和は、社会正義を基礎としてのみ確立することができるとの原則を体現しています。ILOは、国連機関として唯一、政府・労働者・使用者の代表からなる「三者構成」で運営され、すべての男女に社会正義と適正な労働・生活条件を実現するための政策や事業計画を策定しています。その功績により、1969年にノーベル平和賞を受賞しました。また、ILOは、国際労働基準（条約と勧告）の設定と監視を行っています。こうした独自の仕組みにより、ILOは雇用と仕事に関する「現実の世界」から知識を取り入れて活動しています。

誰にもこんな思いはさせたくない

家事労働者の虐待防止

ここに紹介する虐待は、氷山の一角にすぎません。虐待の多くは見すごされています。

撮影された家事労働者たちは、年齢も教育の程度も様々です。自国で虐待を受けた人もいれば、アジアや湾岸諸国などで雇われていた人たちもいます。彼女たちの共通点は、貧しく、選択肢が限られ、ほとんどの労働者にとって当たり前である保護の仕組みを欠いていることです。

虐待をする加害者も多種多様です。富裕層もいれば中所得層もあります。男性もいれば女性もいて、家族で虐待を行う場合もあれば個人が行う場合もあります。

ここに紹介する事例は、特異な事件ではありません。スティーブ・マッカリーとカレン・エモンズは、アジアの4カ所（香港、インドネシア、ネパール、フィリピン）でインタビューを録音し写真を撮影しました。二人は、身体的・精神的虐待や言葉による虐待、児童労働、強制労働、人身売買、強姦、監禁、飢餓、賃金未払い、移動やコミュニケーションの制限を目の当たりにしました。

家事労働者への虐待の記録の多くは統計です。本プロジェクトの目的の一つは、人間的側面から何が起きているかを明らかにし、閉ざされたドアの向こう側で行われている虐待の本質と、それが被害者の心身や人生全体に及ぼす影響を明確に示すことです。

ILOの推計によると、全世界の家事労働者数は5200万人を越え、そのうち2100万人以上がアジア太平洋地域で働いています。これらの家事労働者は、世界のほぼ全ての国々で、経済発展と社会福祉に貴重な貢献をしています。しかし、その多くが移民先で比較的簡単に仕事を見つけている一方、法的保護の不足から、彼女たちはほとんどの国で人間というより所有物として扱われています。家事労働を仕事として認め、自国を離れて一般家庭で働く人々の安全を確保するために、できること、なすべきことは数多くあります。



2011年、家事労働者の権利に関するILOの新しい条約が発効しました。この条約の批准国は現時点で20カ国に達しておらず、アジア太平洋地域では1カ国（フィリピン）のみ、湾岸地域・中東の批准国はありません。家事労働者条約（第189号）の重要性は、各国政府に国内法・執行制度の整備を義務づけるだけでなく、家事労働者も他の労働者と同様の権利を持つ存在であるというメッセージを社会に発信している点にあります。

もはや誰も、これらの写真が映し出す女性たちのような働き方をしてはならないのです。



パビトラ、34歳
ネパール出身
オマーンで虐待

「旦那様が帰宅し、ドアに鍵をかけて私を襲いました。後でそのことを奥様に伝えようと、「嘘をつくんじゃない」と言われました。自分の家族に、なかでも夫に知られたら、私は捨てられるでしょう。」

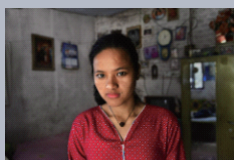
パビトラは、オマーンで5ヵ月間投獄されました。雇い主の女性は、警察官の夫がメイドを強姦したことを信じず、誘惑罪で訴えたのです。5ヵ月後に釈放された時には、すでに妊娠を中絶できる時期を過ぎていました。夫と家族に捨てられるのを恐れ、パビトラは密かにネパールに帰国しました。病気の夫を抱え、4人の子どもを養うためオマーンに出稼ぎに行ったのに、賃金全額の支払いは受けられませんでした。

「斡旋業者はひどいやつでした。「くそつたれ。お前も、お前の家族も息子も死んじまえ。このあばずれめ、お前の息子なんて死ねばいい」そう言って、コーヒークップを私の顔に投げつけました。」

メアリー・グレースは、家族を養い教育費を稼ぐためにお金が必要でした。二人の雇い主の下で働きましたが、どちらも十分な食べ物を与えませんでした。ある日、彼女は市場で気を失いました。救急車の中で意識を取り戻すと、付き添いの男から性的虐待を受けたことに気づきました。病院で被害を訴えようとしたのですが、看護師に口止めされました。結局、稼ぎのないままマレーシアを離れました。



メアリー・グレース、35歳
フィリピン出身
マレーシアで虐待



サラスワティ、20歳
ネパール農村部出身
ネパールで虐待

「雇い主の女性は、私を部屋に連れて行き、素手で私をぶちはじめました。髪の毛を引っ張り、家の中に止める人がいなければ、もっと長い間ぶたれたでしょう……政府は、子どもを家事労働者として使うことを認めてはいけません。」

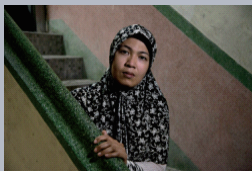
家が貧しく学校に行けなかったため、サラスワティは12歳で家事労働者になりました。彼女は雇い主から虐待を受け、雑貨店主の助けを借りて逃げ出しました。けれども首都カトマンズで、次の雇い主からさらに激しい虐待を受けました。額と膝には、いくつもの傷跡があります。彼女は今もメイドとして働いていますが、学校教育を受け、他の家事労働者に自分たちの権利について教えています。

「優れた立法、優れた法律、優れた社会的保護政策が最初の一步です。アジアでは、ほとんどの国にこうした制度が存在しません。これなくして、人々には善悪の判断がつかえません。」

エリザベスは、香港労働組合連盟の元事務局局長です。彼女は20年以上前に、家事労働者のために立ちあがった最初の人々のひとりです。政治的にデリケートな問題にもかかわらず、彼女は家事労働者の組織化を支援し、組合に労働保護を訴えました。2011年からは、国際家事労働者ネットワークの国際コーディネーターを務めています。



エリザベス・タン
58歳
家事労働者の権利活動家
香港



「“犬ころめ、こっちへ来い。うすのろ。お前みたいなメイドは犬と同じだよ、来るんだ”
そう言われました。」

サウジアラビアでは、1日20時間働き、食べ物も十分与えられず、貯蔵室の床のマットレスに寝かされました。オマーンでは、雇い主の男から性的嫌がらせを受けました。雇い主の妻にそのことを告げると、平手打ちされ虐待されました。香港では夜も働かされ、暴言を投げつけられました。食べ物も制限されました。

シティ、37歳、インドネシア出身、サウジアラビア・オマーン・香港で虐待

「働き始めて3週間後、斡旋業者のところへ逃げようとして、警察に連れ戻されました。斡旋人は言いました。“今度逃げたらお前を訴えるからな。”」

2年の間、チュティクは1日3時間しか眠らせてもらえませんでした。毎日家を掃除し、夕方は一家が経営するパン屋で働きました。雇い主の若い男に靴で殴られ、チュティクは前歯を失いました。彼に何度も引っ張られたため、彼女の耳は変形しています。雇い主の母親に、棒やタタンの杖で殴られたため手首と背骨を骨折しました。故郷に帰りたいと訴えましたが、帰してもらえませんでした。



チュティク、38歳
インドネシア出身
マレーシアで虐待



フィリピン出身のブハイは25年前、助けを求める家事労働者のための避難所としてベスーン・ハウスを九龍に立ち上げました。当初、逃げ込んでくる女性の多くはフィリピン人でしたが、今はインドネシア人が大半を占めます。

ブハイ・バンカワヤン、55歳、家事労働者支援活動家、香港

「労働者を身体的虐待から守るには、労働に関する法律を理解できるように教える必要があります。彼女たちは、自分に権利があることを知らないのです。」

スリングの最初の雇い主は法定最低賃金を払わず、法律で認められた休日もくれませんでした。6ヵ月間、彼女は給与のほぼ全額を斡旋業者に払わなければなりません。契約終了後、スリングは前より条件の良い雇用主を見つけることができました。彼女は今も、香港で家事労働者として働いていますが、インドネシア移民労働者組合の会長を務め、問題を抱えるインドネシア人労働者が真っ先に助けを求める存在になっています。



スリング、34歳
インドネシア出身
香港で虐待



アニスが働き始めて5日後、雇い主の女は飼い犬が吠えて眠れないと激怒しました。彼女は広東語で叫びながら、アニスを台所に連れて行き肉切り包丁をつかみました。とっさによけたものの、薬指を骨折し腿が切れました。アニスは、守衛と別の家事労働者の助けを借りて、逃げ出しました。

アニス、26歳、インドネシア出身、香港で虐待



ベス、20歳
フィリピン農村部出身
マニラで虐待

「雇い主は、私の頭を壁に打ちつけ熱湯を浴びせました。火がついたタバコを押しつけられました。私が犯した罪を罰するためだと言われました。」

ベスは10歳の時、姉の手でマニラに住むカップルのもとに売られました。毎朝4時から夜遅くまで働き、家を掃除し、小さな子どもの世話をしました。無給でした。雇い主の女は、棒や鍋で彼女を殴り、彼氏が出ていくとタバコの火を押しつけるようになりました。7年間この家に閉じ込められた後、ベスは逃げ出しました。彼女は、一度も学校へ行かず、テレビも見ず、ラジオや音楽を聞くこともありませんでした。

「みんなに見捨てられました。兄たちは、私を見ると地面にツバを吐きます。誰でもあれ、家事労働をしに外国へ行くのはやめるよう説得します。止めるために必要なことなら何でもやります。」

インドラの夫が彼女と3人の子どもを置いて家を出て行った後、彼女は、医療費と教育費を払うため出稼ぎにでました。インドラは学校へ行ったことがなく、読み書きできません。13人の子どもの世話をするために雇われましたが、雇い主の家族は売春宿も経営しており、彼女を殴って売春もさせようとしていました。インドラが抵抗すると、一家は彼女をサウジアラビアの家庭に売り飛ばそうとして、失敗しました。結局、彼女はエレベーターのケーブルをつたって逃げ出しました。怪我を負ったインドラは、担架に乗せられてネパールに戻りました。家族は誰も受け入れてくれませんでした。怪我のせいで、今は生計を立てるのが難しくなっています。



インドラ、31歳
ネパール出身
クウェートで虐待



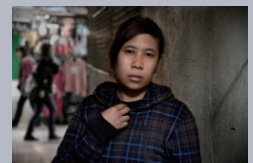
「定期的に診療所で薬をもらっています。今はもう痛みはありませんが、最初の4ヵ月はとても辛かったです。」

スマスリの背中と太股には大きな傷があります。クアラルンプールで、雇い主の男に熱湯をかけられたのです。実際に何があったのか、彼女の話す内容は毎回変わります。ジャワ島東部にある彼女の村の住民は、スマスリの頭がおかしくなったのではと心配しています。

スマスリ、推定60代後半、インドネシア出身、マレーシアで虐待

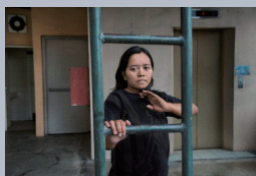
「雇い主は、自分は大変な金持ちで、“もし私に殴られてお前が死んでも、誰も気づきはしないよ”と言いました。斡旋業者は、こう言って私をなだめようとしてました。“黙っていてくれたら、次はとても良い仕事先を紹介するよ”」

スシは香港で1日20時間働き、日の出の頃ようやく眠りにつきました。中国人の雇用主は彼女を平手で殴り、賃金支払い済みという書類に署名させました。7ヵ月間連絡がとれないのを心配した家族が面会を求めたため、スシは雇用主の元を去りました。斡旋業者はその後、別の家事労働者をその家に紹介しました。



スシ、30歳
インドネシア出身
香港で虐待

注：スシの雇用主はその後（別の斡旋業者を通じて）新たにインドネシア人を雇いました。エリワナ・スリスティアニンシというこのメイドへの8ヵ月にわたる虐待は、国際的に広く報じられ、雇用主は刑事上の有罪判決を受けました。



ニニン、32歳
インドネシア出身
ヨルダンで虐待

「私は甥に、“私に何かしたら死んでやる”と言いました。彼は、“勝手に死ねばいい。お前が死んだら、飛行機で死体を運んで誰にも見つからないように落としてやるさ”と言ったのです。」

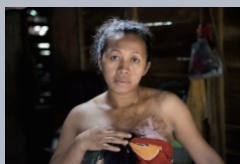
ニニンは、公務員である男性雇用主の父親と甥から繰り返し性的嫌がらせを受けました。彼女が2階の窓を拭いていると、甥が体を触ってきました。彼女は転落し、隣人が助けを呼ぶまでの1～2日間、意識を失ったままコンクリートの上に放置されました。車椅子で故郷に帰ったものの、2年間は床をはって動くことしかできず、家族に治療費を払う余裕はありませんでした。自力で再び歩けるようになりましたが、立ち続けるのはつくろく長距離は歩けません。ニニンは今、小さな事業を起こしたいと考えています。

「一度こう訴えたんです。“私が気に入らないなら、故郷に帰して下さい”すると“家になんて帰すものか。気に入らなきゃ、殴るか殺すだけだよ”と言われました。」

ハリャティンは、娘の教育費を払うためにお金が必要でした。雇い主の女は9人の子持ちで、絶えずハリャティンを殴り侮辱し、彼女を貯蔵室に寝かせました。ハリャティンが夜中の3時に学校の制服を洗っていると、おむつを替えるのが遅いと言って、赤ん坊の便で汚れたおむつを彼女の顔にこすりつけました。まもなく彼女は、頭をパイプで殴られ視力を失いました。腫れがひくまで外出を許されず、普段通り働かされました。



ハリャティン、36歳
インドネシア出身
サウジアラビアで虐待



スリタク、31歳
インドネシア出身
台湾で虐待

「あいつはストーブで熱したフォークを、私の手にのせました。熱いフォークを押しつけたんです……心の中に悪魔が住んでいるようでした。」

家が貧しく毎日の食事にも事欠いたため、スリタクは村を出ました。毎日、朝6時から深夜まで働きました。パスポートを取り上げられ、家族や外の人と連絡をとることも制限されました。あるとき、雇い主に鉄パイプで殴られました。雇い主は、彼女が物を盗んだといって全身に熱湯を浴びせました。顔を横切る長い切り傷をはじめ、スリタクの体には20以上の傷跡があります。

「お手伝いさんがいなければ、私は仕事に出られませんでした。お手伝いさんは、自分の生活のために給料が必要です。私にも自分の仕事があり、より良い暮らしのために給料をもらっています。同じことなのです……家事労働者にも労働法を適用すべきです。彼女たちがしていることは、間違いなく労働です。」

ジュディは、香港労働組合連盟の執行委員会メンバーです。彼女は当初、家事労働者の組合加入を認め、その条件改善のために闘うことに反対していました。しかし、考えが変わりました。彼女は現在、家事労働者を支援し、労働組合加入を認めるための集会やキャンペーンに参加しています。



ワイ・リン(通称ジュディ)・ング
54歳
労働組合役員、香港



スティーブ・マッカリー

インドや東南アジアを中心に活動する国際的に著名な米国の報道写真家。アフガニスタンなど戦争で荒廃した国々を撮った作品で知られ、バイルート、カンボジア、フィリピン、湾岸戦争、旧ユーゴスラビア、チベットなど多くの国際紛争・内戦の現場を取材。戦争が人の表情に与える変化を捉えることで、戦争の惨禍を浮き彫りにする。難民キャンプで出会った少女を撮影した「アフガンの少女」は、ナショナル・ジオグラフィック誌の創刊史上最も有名な作品とされる。ロバート・キャパ賞、世界報道写真財団が選ぶ全米報道写真家賞（4回）、全米報道写真家協会が選ぶ年間最優秀雑誌写真家賞、オリバー・レボット賞（2回）を受賞。2014年には、英国王立写真協会から生涯の功績を称えセンテナリー・メダルが授与された。彼の作品は多くの一流雑誌に掲載され、ナショナル・ジオグラフィック誌に度々登場している。著書に、『インペリアル・ウェイ』（1985）、『モンズーン』（1988）、『ポートレート』（1999）、『南・東南アジア』（2000）、『聖域』（2002）、『仏への道—チベットの巡礼』（2003）、『スティーブ・マッカリー』（2005）、『ルッキング・イースト』（2006）、『スティーブ・マッカリー：アイコンック・フォトグラフ』（2012）、『秘話—写真の背後のストーリー』（2013）など。



カレン・エモンズ

ニューヨークでライフ誌の記者を務めた後、25年間アジアに暮らす米国人ジャーナリスト。新聞・雑誌・国連機関を対象に、児童労働、強制労働、人身売買、移民虐待、家事労働者の虐待などに関する報道を行っている。彼女が執筆・編集した記事は、『ファーイースタン・エコノミック・レビュー』『タイム』『ピープル』『フー』『リーダーズ・ダイジェスト』『デベロップメント・アジア』『南華早報』『サンフランシスコ・エグザミナー』『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』『ロンドン・サンデー・タイムズ』に掲載されている。ライフ誌の編集者が手がけた書籍『人生の意味』にも寄稿。グローバルファンドの報道プロジェクト「アクセス・トゥ・ライフ」でも、スティーブ・マッカリーと協力した実績があり、抗レトロウイルス薬の服用がHIV患者の人生をどう変えるかベトナムで取材した。

このプロジェクトは、ILOアジア太平洋地域総局の主催によるものである。地域総局は、無償で時間を割いてくれたカレン・エモンズ、スティーブ・マッカーリーの両氏に謝意を表する。また自らの虐待体験を語り、撮影を承諾してくれた人々の勇気なしに、本プロジェクトと展示の実現はなかった。家事労働者や移民に関わる諸機関の職員も、貴重な時間や関係先、リソースを惜しみなく提供してくれた。特に、以下の方々に感謝する。

香 港

国際家事労働者ネットワーク書記長兼国際コーディネーターのエリザベス・タン。国際家事労働者同盟アジア地域コーディネーターのイプ・ピュイ・ユ（通称フィッシュ）。インドネシア移民労働者組合メンバーで家事労働者のスリング。香港労働組合連盟書記兼香港家事労働者組合総書記のウォン・シュ・ウーン（通称ミシェル）。フィリピン移民労働者組合創設者兼リーダーで家事労働者のシーラ・エストラダ。在香港ネパール家事労働者組合会長で家事労働者のチュニ・タパ。移民女性避難所ベスーン・ハウスのエドウィナ・アントニオ・カリムタン及びエステル・C・バンカワヤン。アジア太平洋移民労働者ミッションのレイ・エイシス。国際移民連合会長兼インドネシア水増し請求禁止連合（香港）のエリ・レスタリ。通訳のカニカ、チトラ、シト・ヌルディヤ。

インドネシア

Nurharsono 理事兼現地職員で移民ケア支援スタッフのアニス・ヒダヤ。通訳のジタ・タンブポロン、ビン・ムカロマ・ムタロム。

ネパール

ネパール労働組合総連盟（GEFONT）書記次長ペンバ・ラマ、同企画委員会メンバーのビンダ・パンディ。ネパール独立家事労働者組合会長ソヌ・ダヌワール。「社会サービスと人権における児童と女性」（CWISH）のブラディップ。POURAKHIのマンジュ・グルン、ビジャヤ・ライ・シュレスタ、ムナ・ゴータム。ABCネパールのチャンダニ・ラナ。Maiti Nepal。通訳のケサン・レンチェン。

フィリピン

ビサヤン・フォーラム財団会長兼理事のマリア・セシリア・フロレス・エバンダ、同財団のアルフレッド・アリ・レジン、カレン・ナベラ、シェリル・ロジーナ、アグネス・ヴィレガス。Kampiのルーサー・カルデロン。Kakampiのフェ・ニコデマス。Kanlугanのノエル・バレンシア及びビッキ。オペレンターのジェローム。リー・ヴァルは香港のシェルターを紹介してくれた。ILOのミネット・リマンド及びアナ・ヴァレンシア。通訳のミシュカ・ボッシュ。



www.ilo.org/asia



www.facebook.com/ILO.ORG



www.youtube.com/user/ILOTV



www.flickr.com/iloasiapacific



[@ilo](https://twitter.com/ilo)



本プロジェクトのためにスティーブ・マッカリーが撮影した他の写真を
ご覧になりたい方は、下記サイトをご参照下さい。

<https://www.flickr.com/photos/iloasiapacific/sets/72157639783402295>



ILO Regional Office for Asia and the Pacific

United Nations Building
Rajdamnern Nok Avenue
Bangkok 10200, Thailand

Tel.: +66 2288 1234

Fax: +66 2280 1735

Email: BKK_COMMS@ilo.org

www.ilo.org/asia

ILO駐日事務所

東京都渋谷区神宮前 5-53-70
国際連合大学本部ビル 8 階

電話：03-5467-2701

Eメール：tokyo@ilo.org

www.ilo.org/tokyo

